

ま ったくどこにも行かない夏も耐えがたい、という呼びかけに応じて、山仲間と三瓶山を訪ねた。この二十年、毎年各地の山へ赴き、近年は東北にまで足を伸ばすようになったのだが、今年はコロナに行く手を阻まれた。

もつとも一日歩き続けてくれたになった体を温泉に浸けて一気に解放し、酒と旅館飯を堪能することをもつて成就する私たちの旅である。目的を絞り込んでいくと山さえ消えてしまいかねないので、近場になったところで喜びが減じることはない。

山を歩いていても、行き帰りの車中でも、どこそこのがあれがうまかったなどの話を飽きもせず繰り返すのが常だが、味覚や嗅覚の記憶とともに登った山の空気が岩肌、空がよみがえってくるので、だれもが話とは別に頭の中ではそれを味わっている。話の上で背景に甘んじていても、やっぱり主役は山である。

三瓶山を縦走して大汗をかき、くたびれた体を持つて行った先は、湯抱温泉。溪流にかかる橋のまわりに数軒の旅館が並ぶが、今も営業を続けているのは、一軒だけである。

「昔は、宿泊客がバスで来られていました。」

女将さんの話だと、連日の宴会で近所にはコンパニオンを生業とする女性たちもいて往事は賑わったのだ

そうだ。きつとその頃は女将もバシッと和服で決めて切り盛りしていたのだろうが、今はTシャツに前掛け、化粧気もまったくない。たぶん同世代。「今日のお泊まりは皆さんだけですから。」

老舗旅館を貸し切りに行っていると思うと豪儀だが、維持していく苦勞も並大抵ではなからうに加えてコロナ、と気の毒が先に立つ。

夕食は、私たちだけなので、広間の中央を贅沢に使って並べられた心づくしを味わう。宿の売りである山鯨、猪肉がうまかった。夏の盛りにも熱燗が飲みたくなったのは、肉の甘みと「猩猩」と大書した掛け軸のせいだが、猩猩に見られている割には、旅館に儲けてもらうほどには酒も進まず、早々に横になった。

翌朝、川のせせらぎと鯛の鳴き声を聞きながら散歩する。誰一人会わない。旅館の隣は、かつては土産物店、今は鳶の這った空き家だった。

薪で焚いた朝湯と朝食を存分に味わって、女将さんと息子さんに見送られて旅館を後にする。あと百年こんな温泉旅館が続いていけるためには、人の心の何を搔く。散歩の際にブヨに食われた。この時期、きれいな水の湧くところでは警戒しないといけないこと、すっかり忘れてしまっていた。



專業ババ奮闘記(その2) 18

木幡智恵美

懐妊(2)

「ヨーグルト、預かってもらえる。当分食べられそうにないに」と、娘が言う。つわりがひどくなつてきて、向かなくなつたようだ。うちでも作っているカスピ海ヨーグルト、娘が大学の頃からものだから、二十年近くになる。寒い時は、炊飯器やコンロの近くの暖かい場所に置き、暑くなると、分離し始めた冷蔵庫に入れる。そうして菌を絶やさずに作り続けてきた。寛大の時や実歩の時は、里帰りの際に預かった覚えがあるが、こんなに早い時季に預かることになるとは。

お産は「たんび(度)が新た」と言われる。私の場合、娘を妊娠した初期に、一日梅干し一個と水分だけで済ました日があった。「つわりじゃない」と同僚に言われ、産科で診てもらったが、妊娠反応は出なかった。その後、食生活は元に戻り、普段通りバイクで通勤、友だちが来た時は一緒に合気道の稽古もした。その一か月後、やはり何かおかしいと思って受診したらすでに三カ月とのことだった。長男妊娠の際は、ポテトサラダが食べたくて、ジャガイモをゆでてつぶす手間を省くために、マッシュポテトの素を買って作っていたほどだ。貧血で、仕事中にトイレに駆け込み、周りが真つ暗になって倒れそうになったこともある。二男の時は、ミルクキーを好んでよく食べていた。だが、食べられなかったり、戻したりはせず、つわりは軽く済んだ方だと思ふ。

娘は、毎回ひどいつわりに襲われる。妊娠初期から始まり、受け付けない食べ物があればこれ出てくるし、食べても戻してしまう。職場でトイレに入つて出ると、そばにいた人が「大丈夫？」と必ず声を掛けてくるという。「もう、みんなにばれてるわ」普段、職場で大きな声でしゃべる娘が、途端に元気が無くなり、頻繁にトイレに駆け込むようになるので、すぐに気づかれるらしい。今回も、上司に報告する前から、周りの人はすでに察していたようだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。香港国家安全維持法に違反したとして逮捕された民主活動家の周庭は保釈されたあと、「今まで4回逮捕されたが、正直、今回は一番怖かった」と語ったと報じられている（8月12日朝日新聞デジタル）。

年金生活者 国安法には香港の既存の法律にはない恐ろしさがあることを彼女の発言はあらためて示した。

周が「一番怖かった」と感じた理由は「どういう形で国安法に違反したのか。過去の24時間、全然聞いていない」（同）ことにある。彼女が過去に逮捕された容疑はいずれも「一国二制度」下の香港の法律にもとづいているはずだ。その法は宗主国だったイギリスの近代的な法の原理を下敷きになっているから、どの行為が違反の容疑となっているか、警察からそのつど本人に明示されたと推測される。

これに対して、国安法は条文が幅広い解釈の余地を残す曖昧さを持つているうえ、その適用にあたっては、今回

の逮捕に見られるとおり、いつのどの行為が違反にあたるのか警察は告げない。どんな掟かわからないまま従うことを強制されることの恐怖を周庭は強調したかったに違いない。

30代 「心の準備ができていないまま逮捕されました」とも彼女は語っている（同朝日新聞デジタル）。

年金 この不意打ちの恐怖体験は、フロイトのいう反復強迫、今でいうPTSD（心的外傷後ストレス障害）を引き起こす可能性があるほど大きなものだったに違いない。事前にできなかつた心の準備を事後にしようとして、そのときの経験や夢や回想の中で繰り返し想起するのがこの症状だ。

その原型は生誕時にある。母胎の楽園からいきなり荒れ野に放り出された新生児は、従い方のわからない掟に従うことを強いられる。楽園の中で浸っていた万能感を剥ぎ取られ、おのれの無力を思い知らされる中でこの経験は恐怖に満ちている。

30代 朝日新聞は周庭のことを「趣味

は日本のアニメで、アイドルグループ『嵐』のファン」と紹介していた（8月14日朝刊）。

年金 実際には「ファン」の域を超えて自身が「アイドル」と化しており、それを中国政府は最も恐れたと思われる。中国批判が国内外で大衆的な広がりをおぼえる可能性があるからだ。

その点で対照的なのが、同じ国安法違反容疑で逮捕された香港紙「リング日報」創業者の黎智英だ。彼はあまり表に出ない。発行紙は中国寄りのメディアが多数を占める中で共産党政権を真正面から批判している。そのぶん「お堅い」イメージがあり、おそらく読者はインテリないしそれに近い層が中心で、周の支持者のような大衆的な幅広さはないと想像される。

それでも北京政府が彼を狙い撃ちにしたのは、こういうインテリを中心とした「お堅い」中国批判なしには、それが大衆的な広がりを持つこともないことを承知しているからだ。アイドルもインテリも監獄に閉じこめてその発

信を封じる以外にないと習近平政権は

考えているのかもしれない。それには逆効果も予想される。とりわけ周庭の場合は、横暴な政権にひどい目に遭わされるアイドルのイメージが広がり、大衆的な反発が強まる可能性がある。

30代 黎はアダムとイブの食べた禁断の知恵の木の神話をもとに「リング日報」という紙名にしたそうだ（8月13日朝日新聞朝刊）。

年金 独裁に抵抗するには知恵こそ欠かせない武器であることをそれは象徴している。

イブはエデンの園に生っているその実を食べるよう蛇にそのかさされる。

「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」（共同訳『聖書』）と。彼女はその実を取って食べ、それを渡されたアダムも食べる。「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」（同）。怒った神は、イブに子を生む苦しみを、アダムに働く苦しみを

与え、エデンの外に追い出す。

この神話は母胎の楽園を追われてこの世界の荒れ野に放り出される生誕の過程を象徴している。知恵の実を食べる行為は胎児の成長の象徴だ。いずれ胎児は母胎より大きくなり、それを壊すだろう。その前に外に出さなければ

ならない。母はわが子を楽園から追放

する。知恵を得たアダムとイブが、エデンには知恵の実のほか命の实があることを知り、それを食べて神のように永遠に生きる者とならないよう、神がふたりをエデンから遠ざけたように。

母胎の楽園から荒れ野にさまよい出た新生児は、従い方のわからない掟に従うことを強いられる。わが身を守るには、わからない掟をなんとかしてわからなければならぬ。それには知恵が必要だ。その知恵は胎内で身に着けた。楽園からの追放と引き替えに。乳児はその知恵を働かせ、庇護者である母とかけ引きをすることを覚える。

国安法は従い方のわからない掟の一種だ。そんな恐怖の法の正体を知り、わかる法に置き換えることを香港の民主派は運動の課題としている。そのため武器は、中国が禁断の木の実としてタブー化したがついている「知恵」であることを、黎智英や周庭らはよく承知しているはずだ。

ニュース日記 750
中村 礼治

香港の民主派